スウェーデン・カナダ・セネガル**智学体験記** ヨーテボリ大学(学部交換留学)

ヨーテボリ大学(学部交換留学) モントリオール(私費英語研修) ダカール大学(私費仏語研修)

経済学部 4 年 今井 憲佑

留学先

- ・ヨーテボリ大学 (スウェーデン)
- ・モントリオール (カナダ)
- ・ダカール大学(セネガル)

期間

- ・2010年8月末~12月末
- ·2011年3月末~6月末
- · 2011 年 6 月末~8 月中旬

動機

- ・部活をやめて、大学生活に物足りなさを 感じていたから
- ・ヨーテボリを経て、もっと語学を勉強したいと思ったから
- ・途上国での生活を体験してみたかったから



•航空券 ≫

- ・to Gotheburg, to Japan 出国時・帰国時、他国を旅行で経由 したため割愛
- •to Montreal 128,390円、from Montreal to Dakar \$1296.50
- •from Dakar to Japan \$1387.30
- レート≫
- ・1スウェーデンクローナ=11.35円
- 1カナダドル=74.93円
- ・655.957CFA=1ユーロ=103.50円

おる

■はじめに――三段跳びのホップ・ステップ・ジャンプ――

◇なぜ留学か?

僕は大学2年の夏に部活を辞め、翌年からなんとなく高井ゼミに入った。留学意識の高いゼミ生が多い中、僕は全く興味がなかった。しかし、部活を辞めてから自分の大学生活に物足りなさを感じており、先生や先輩方の話の聞いていくに連れて留学に興味を持つ。

最初は第二外国語としてフランス語を学んでいたのでフランスへの留学を希望していた。先輩方の「面接でしゃべれなくても受かるよ」というアドバイスを受けて、挑んだ面接は惨敗であった。



◇なぜスウェーデン交換留学か? ―英語での異文化交流―

交換留学の締め切りが近付き、選べる選択肢はスウェーデンとスリランカに限られていた。スリランカもとても興味深かったが、フランスに留学できると思い、ヨーロッパでの生活を思い描いていた僕はなんとなくスウェーデンを選んだ。しかし、この選択が僕の人生をここまで変えるとは思ってもみなかった。なんとなく選んだスウェーデンだったが、調べるに連れて好きになり、滞在するに連れてまた好きになり、帰る時には大好きになっていた。ありがとう、スウェーデン。いや、ヨーテボリ。

しかし、僕は根がめちゃくちゃダメ人間なので留学に行くまで勉強に身が入らず、語学力は低いままでの出発となった。もちろんスウェーデンに着くと会話は成り立たず、苦労した。スウェーデンでの留学では、勉強よりも異文化体験・交流に重きを置いたものであった。

◇なぜ仏語圏カナダで英語研修か? ―英仏語の懸け橋―

そしてスウェーデンを経験した僕は、「もっと英語を学びたい。第二外国語で履修したフランス語も学びたい」と思い、英語と仏語のバイリンガルの街、モントリオールを選択した。ここでは語学学習に集中した。スウェーデンとモントリオールを経て、TOEIC は530点から865点まで上がった。

◇なぜアフリカで仏語研修か? ―初心貫徹の仏語圏―

モントリオールに行く前から、ダカールでフランス語の夏期講習があることを先生から 聞いていたので、異文化体験と仏語学習の両方を経験できると思い、ダカール大学への留 学を決意した。(編集部注:学部生のアフリカ留学は一般に勧めない)。

大学入学当初には、こんなにもいろいろ経験し、成長できると思っていなかった。これらの留学を成功させることができたのは、高井先生のアドバイス、ゼミの先輩のお話、両親のサポートがあったからだ。この場を借りてお礼を言わせていただきたい。

スウェーデン交換留学(8月から12月)

■ヨーテボリ大学・学部交換留学

学部間留学でヨーテボリ大学に行き、約4か月半経済学部で勉強をした。ヨーテボリ大学へは毎年数人留学しており、他の方もトランスジャパンに投稿しているので、僕は軽く触れておくだけにする。

8月下旬にヨーテボリに到着すると、ヨーテボリ大学の学生が空港まで迎えに来てくれて そのまま入寮手続きなどを済ませ、寮まで送ってくれた。大学にはとても多くの交換留学 生 (特にヨーロッパ圏内)が来ていた。交換留学生が到着する時期に合わせて大学側がた くさんのイベントを催してくれるので、友達作りは他の留学よりもスムーズにいくと思われる。

僕が履修した授業は週1,2回のものが多く、1週間で多くて3回しか授業がなかった。 だからといって楽なわけではなく、自主的な学習がとても重要だった。英語での専門書を 読むということは思っていた以上に時間がかかり、頭に入らなかった。そのため、先生に 重要なチャプターを教えてもらったり、飛ばし読みをして読むページを必要最低限に減ら した。

■国際交流

授業が週に 2,3 回しかないので、僕は友達作りに力を入れた。バカンス気分で来ている ヨーロッパ人の学生もいるので、週末は何かしらのパーティーが絶対にある。一緒の行く 友達がいなくてもパーティーには極力参加するようにしていた。しかし、僕の場合は英語 が全然しゃべれないので自己紹介をした後の会話が続かないという問題点があった。 沈黙 が続いておもしろくないやつだと思われたらいやだから、自己紹介 or 簡単なあいさつの後 は次の人に話しかける。そのおかげで顔見知りだけはとにかく多かった。そうして知り合った中から、気が合いそうな人とは連絡を取り合って友達になった。

日本語を勉強しているスウェーデン人とも友達になった。中には僕よりも日本語がうまいんじゃないかという学生もいた。とにかくスウェーデン人は美男美女ばかりで、そのうえとても優しい。道に迷って見知らぬ人に尋ねた時にいやな顔をされたり、無視されたことがなかった。

スウェーデンはとてもきれいな街で人々も優しく、多くの学生が留学に来ている。もしどこでもいいからなんとなく留学したいと思っている人がいたら、スウェーデンは一押しの街だ。僕はヨーテボリに 4 か月留学して辛いこともいっぱいあったが、留学して本当に良かったと思っている。この経験のおかげでもともと人見知りという短所も克服され、人と関わるのが長所になったくらいである。

カナダ・モントリオール英語留学(3月から6月)

■モントリオール英語研修:留年するということ

3年後期にスウェーデンへ4ヶ月間の学部間留学を経て、12月に帰国した。しかし、もっと英語を勉強したいと思ったので、3ヶ月後に再度、留学することにした。元々、フランスへの留学を希望していたため、フランス語と英語を両方学べるバイリンガル地域として、カナダ・ケベック州のモントリオールに決めた。

しかし、将来英語やフランス語に関係する職 に就きたいというわけでもなく(もちろん可能



性としてはありうる)、留学すると1年間留年してしまうので、本当に自分に留学する価値 や必要があるのかと大変悩んだ。いろんな人に相談させてもらい、指導教員のアドバイス、 両親のサポート、先輩の助言によってようやく決心することができた。結果的には留年し ても、留学して良かったと本当に思っている。

■準備・出発・到着

モントリオールへの留学はスウェーデンにいる時から考えていたが、決心するのに時間がかかり、急に行くことが決まった。出発 1 週間ほど前から語学学校と直接連絡を取り、貸し倉庫への引っ越し、休学届けの提出、現地での滞在場所の確保、航空券の手配など、やることが山積みで準備不足のスタートだった。

日本人は 6 カ月以下の滞在だと事前にビザを取る必要がなく、カナダ入国時に観光ビザがおりるので、ビザに関しては特に準備することなく出発の時を迎えた。しかし僕の場合は、そのままダカールへ行くため、まだカナダ出国の航空券をとっていなかった。そのためチェックインの際には、カナダへの入国ができずそのまま帰国させられる可能性もあると言われ、カナダでの入国審査では 30 分ほど高圧的な態度で質疑応答があった。そしてなんとか入国が許可された。

空港に到着すると、荷物は飛行機を乗り換えたアメリカで止まっていて受け取ることができなかった。また、急な到着だったため学校側からのピックアップサービスもなかった。そこで空港のインフォメーションセンターで安宿の紹介と行き方を教えてもらい、その日は無事にホテルに着くことができた。こうして僕のモントリオールでの生活が始まった。

■英語学校

英語学校を選ぶ際、一クラス8人以下、週20時間以上の授業(結局週25時間のプログ

ラムにした)、アジア人の割合が少ないというのを条件に決めた。実際学校に着いてみると、小さな語学学校で英語のクラスは一つしかなかったもののアジア人は僕しかおらず、フランス人2名、ブラジル人1名、コートジボワール人1名だった。小規模なため自分にあったクラスを選ぶことができないが、このクラスのレベルは僕にぴったりで各々の長所や短所が違うので効率よく英語を学ぶことができた。先生は1年を通しての常勤の先生と生徒が増える時期だけの非常勤の先生がおり、常勤の先生は本当にプロフェッショナルで人間としても尊敬できる人に出会えたので本当に良かったと思う。

費用:授業料 12週間 \$3,420 (他の語学学校と比べると少し高め) ホームステイ 12週間 \$2,520

その他 \$350

■ホームステイ

スウェーデンにいた時は寮生活で一人の時間が多かったため、今回は絶対にホームステイをして嫌と思うほど英語漬けになろうと思っていた。カナダに行く一週間前に語学学校に連絡したにも関わらず、到着前日に無事ホームステイ先が決まった。ホームステイ先はギリシアからの移民の一家で 7 人も子供がいる大家族だった。でも子供たちはみんな成人していたので、家にはほとんどいなかった。この一家は常に留学生を 3 人受け入れているので、扱いにはとても慣れていた。その分、歓迎などはなく一言挨拶をするだけというそっけない感じだった。朝ご飯、夕ご飯は食べる 3 時間前にはできていて、各々好きな時に食べ、それ以外はみんな部屋にひきこもっていた。あれ?思ってたんとちがう。お父さんはレストランで夜働いているのでほとんど会話することなく、唯一の話し相手はお母さんだけだった。お母さんはとてもサバサバしている人で最終的にはケンカ友達のようになってお互い言いたいことを言える関係になっていた。でも他の留学生に比べて怒られる回数も多かったため、あまり好かれていないんじゃないかという不安もあったが、最後の別れの時に涙ぐみながらナイスガイだって言われた時は、めったに心が動かされない僕もちょっと感動した。その後、珍しく昼間にお父さんが起きていたのであいさつに行った。

お父さん「お前はナイスガイだ。 中国に帰っても元気でな。」

おれ「じゃぱぁーーーーんっ!!!」

そんな感じでモントリオール でのホームステイは終わった。正 直なところ、あたりでもはずれで もないホームステイだった。



■私生活と国際交流

クラスメートが少ない上に学生がほとんどいなかったため、週末にクラスメートと飲みに行く以外、特にやることがなかった。家に帰ってもほとんど話し相手がいないので、モチベーションも下がり気味だった。こんなんやったらあかーん!と思い、何か行動を起こそうと思った。まず目をつけたのが毎週木曜日に開かれる Language Exchange Café だった。行ってみると日本人もカナダ人もたくさんいた。そこにいるカナダ人の年齢層が結構高くゆっくり話すには楽しいし、日本への留学経験者もたくさんいたので英語でもわかりやすく話してくれるのでとても勉強になった。

しかしやっぱり同年代の友達とわいわい騒ぎたいと思い、次に考えたのが大きな大学には日本語学科があるだろうということだった。そして検索し、連絡してみると Montreal 大学と MuGill 大学の日本語学科の教授から大歓迎だというメールを頂いた。 Montreal 大学では北海道大学への留学を希望している生徒を紹介してもらい、 MuGill 大学では授業中に日本についてのプレゼンをさせてもらった。そこでもまたたくさんの人と出会うことができた。大学の授業にはさまざまな国籍の生徒が参加しており、Facebook で連絡をとってその後個人的に遊ぶ友達も増えた。学生と友達になると現地の学生がどのようなことを考えているのかがわかり、言語だけでなく、趣味や政治の話まで幅広く話すことができる。このような出会いのおかげで $15:00\sim18:30$ のカフェで一人で勉強する時間を日本語学科の生徒と一緒に勉強したり、土日に一人で街をぶらぶらする時間を友達と一緒にお祭りに行って過ごすなど、より有意義なものになった。

セネガル・ダカール大学仏語留学(6月から8月)

■ダカール序章

フライトの予定が狂い、予定より5時間遅れ。早朝5時空港に到着。 空港というにはあまりに汚く簡素な作り。空港を出ると砂っぽいにおいのする外はうっすら明るい。

そう思う間もなく、大量の黒人に囲まれる。タクシー、 タクシーと言いながら腕を掴んでくる見知らぬ黒人。それを振りほどき、群衆をすり抜ける。今はまだ5時。



知り合いに電話するには早すぎる。8時まで待とう。しかしまわりには怪しい人だかりとタクシー以外見当たらない。レストランもカフェも、ベンチさえもない。地べたに座って待とう。でも眠い。前日はほぼ徹夜で飛行機でもほとんど眠れなかった。

座っていると 3 人ほどの黒人に囲まれた。眠たい、でも動きようがない、ここで待つしかない。そう思ってこの黒人たちと 3 時間過ごすことを決意し、無言の契約を交わす。人気のない場所に連れて行こうとする黒人。外で待つと言い、移動することを断り続ける僕。「テランガ、テランガ(現地の言葉でホスピタリティ)」と言い、僕の手に謎のブレスレットを握らせてくる目の濁った黒人。断り続ける僕。

すっかり日も昇り、すべてを断り続けること 3 時間。ようやく 8 時。電話しよう。謎の 黒人に携帯を借りて連絡。知り合いの知り合いが迎えにきてくれるとのこと。ここで謎の 黒人とはお別れ。しかし無言の契約を交わした以上、タダではお別れさせてくれない。そ のため、3 時間付き合ってくれた感謝の気持ち、と言ってありえないレートで両替。しかし それでは満足しない謎の黒人。おれはお前のために寝てないんだぞ。お前はおれの携帯を 使ったじゃないか。お前はおれより金持ちなんだから金を払え。僕は何も頼んでいない。 す べてはむこうが勝手にやってきたことだ。そう思い、ありえないレートでの両替以上は払 いたくない、と謎の黒人と口論。 あまりのしつこさに負けて怒りの感情とともに 1000CFA (約 180 円)を渡す。

ようやく迎えの車がきた。その車に乗り込むと 3 時間を共にした黒人も現地語でドライバーと何かを話し乗り込んできた。そして車は動き出す。このドライバーは本当に知り合いの知り合いなのだろうかという不安とともに。聞こうにもまともにフランス語のしゃべれない僕。ましてや現地語なんて「ジャラジェフ(ありがとう)」しか知らない。 謎の黒人は途中で降り、つたないフランス語でドライバーに確認するとどうやら本物のようだ。

灼熱の太陽の下、窓を開けて走り続ける車。空気は汚れきっている。エコという言葉を 知らないであろう黒い排気ガスを出しながら走る大量の車たち。乾いた空気の中、車によってまき散らされる砂ぼこり。路上には段ボールを食べる羊の群れ。人を乗せておおきな 荷台をひっぱりながら車道を走る馬。両手に生きたニワトリを 4 羽ずつ持つ老人。頭に大きな荷物をバランスよく乗せて歩く女性たち。みずぼらしい格好をしてカンカンを片手に道行く人に手を伸ばし何か物をねだる子供たち。

そんな田舎道も過ぎ、街へ入って行く。事故が起こらないのが不思議なくらいの乱暴な 運転で渋滞する道。路上には大量の商人たち。各々違うものを売り歩く。ティッシュ、水、 SIM カード、サングラス・・・。そして車が止まる度に買うか?と話しかけてくる商人た ち。 そんな街、アフリカの最西端にあるセネガルの首都ダカール。これから1ヶ月半生活 する街。

今までの21年間見てきたものとはまったく違うものを見ても、特に驚かなかった。これがセネガルかー、と思いながら車に乗っていた。僕は良い言い方をすれば適応力があり、悪い言い方をすれば感受性がないのだ。

しかし、運転手に話しかけたときに、ようやくセネガルに来たという実感がわいた。空 港の Baggage claim も空港前の怪しい黒人も英語が通じたのに、この優しそうな運転手に は全く通じなかったからだ。セネガルに着いた頃の僕のフランス語力は"Je suis étudiant."、"Je m' appalle Kenyu"、"J' habite à Sapporo"程度だった。なんとかしぼり だしたフランス語も、発音が悪いせいか、全く伝わらなかった。そのため運転手とほとん ど会話することもできなかった。

そこで一度 Lonely Planet を見て、現地のウォロフ語で「名前は何?」と聞いた。すると、 笑顔で答えてくれた。 その時、こんなつたないフランス語だけではだめだ、 ウォロフ語も 勉強しよう、と決意した。

■準備・出発

「フランス語を勉強するならダカール大学のサマーコースがいいんじゃない?」パリ生活の長い指導教員の助言をきっかけに、セネガルへの留学を決意した。今後フランス語を一番活用できるのはアフリカだという発想だ。ゼミ大学院生には仏語圏アフリカ人も2人いる。



決めたは良いものの、情報量が少なすぎた。大学の

HPを見ても、サマーコースについてのページはない。メールを英語と仏語で3回したにも関わらず返信はなかった。国際電話は、フランス語に自信がなかったので避けていたが、モントリオールからフランス人の友達と一緒に何度やっても電話中。本当にサマーコースが開講されるのかもわからないまま、カナダからセネガルへ発つ日が近づいてきた。

モントリオールの病院に行き、必要なワクチンを接種した。僕が予防接種を受けたのは、 黄熱病、破傷風、A型肝炎、腸チフスの4本である。この4本を接種して、費用は約3万 円だったと思う。出発二週間前だった。 一週間ほど前にようやくつながる電話番号 (33 824 09 97or 77 632 31 48) を見つけ、受講できることを確認。しかし大学側からは寮などの斡旋はしておらず、2 カ月だけの滞在先を見つけるのは難しいだろうと言われた。僕はたまたまモントリオール大学に日本語を勉強しているセネガル人の友達ができたので事情を説明すると、親にホームステイ先を探すように頼んでみてくれることになった。結局出発前日まで何の音沙汰もなかったが、なんとかセネガルにいる知り合いの電話番号と名前を書いたメモだけ、出発前にもらった。

■友達の継母アイシャ

僕のセネガル留学を語る上で欠かせない人物が、モントリオールのセネガル人の友達の継母アイシャだ。ホテルに着いて、ようやくアイシャに会うことができた。ふくよかな体型で優しそうだなという印象を受けた。アイシャは英語がペラペラなのでセネガルについていろんな質問をさせてもらった。



アイシャの友達の家に連れて行ってもらった。

そこでは、アイシャの友達家族が談笑しており、快く迎え入れてくれた。そして 3 時頃になると、味付けされたごはんに煮込まれた丸ごとの魚と野菜がのった大きな銀の皿が出てきて、セネガル初日にセネガルの家庭料理を食べさせてもらった。

見た目はめっちゃ味が濃そうで油でテカテカ。食べてみると・・・・・おいしぃーーーい!おいちい。セネガルもお米が主食で日本人の好きそうな味付けだ。大皿の横には緑のソースや香辛料の塊みたいなものがちょこっとのっており、各々好みでつけるのがセネガル流の食べ方だ。

おいしいご飯を頂いた後に出てきたのがセネガルティーだ。とにかくセネガル人はこのお茶が大好き。少し大き目のショットグラスみたいなグラスに入っており、見た目は泥水。本当に泥水そっくり。もちろんそのお茶もいただき、恐る恐る飲んでみると、めっちゃくちゃ苦くてめちゃくちゃ渋くてめちゃくちゃ甘い!w本当に意味のわからない味で、一口程度しか入っていないけれど飲むのにとても苦労した(でも何度も飲んでいると癖になる味で、帰る時には大好きになっていた)。

翌日、アイシャと会ってきのうに引き続いてホームステイ探しを手伝ってもらった。アイシャのお母さんの友達が月々28,000 円で朝夜ごはん付きで受け入れてくれるというのだ。その日のうちにアイシャと家を見に行った。サバイバルなホームステイも覚悟していたのだが、思っていたよりもきれいだった。即決し、その日からそこに住ませてもらうことにした。

アイシャのおかげで無事ホームステイも決まり、お礼を言って別れた。しかし、その後 も毎日「調子はどう?困ったことはない?」と電話をしてくれたり、家に招待してくれて 夕飯をごちそうになったりした。またセネガルについて 3 週間ほど経ったときに、体中に湿疹が出てすごいかゆみが出た時もいい医者を探してくれたり、病院まで送ってくれようとした。見ず知らずの僕にここまで優しくしてくれたアイシャには本当に感謝している。なんとかなるだろうと思って来たセネガルだったが、もしアイシャに出会ってなかったら、異国の地でこれほどスムーズに物事は進まなかっただろう。

■ホームステイ

僕を受け入れてくれた一家は学校から徒歩とバスで最短25分のところにあり、21人の大家族だった。セネガルでは親族の関係が深く、21人と言っても直接の孫や子供はほとんどいなかった。おじいちゃんとおばあちゃんを中心に幅広い親族が一つ屋根の下に住んでいた。またセネガルでは少し裕福な家庭なのでお手伝いさん1人、12歳くらいのお手伝い見習い?が3人いた。



みんな快く僕を受け入れてくれた。年齢の高い人はいつも「こっちにおいで」と言ってたわいもないことを話してくれたり、同年代の人は何かイベントがあると誘ってくれた。 10 歳くらいの子供たちは、ひまになると僕の部屋に入り浸って一緒に遊んだり、時にはフランス語も教えてもらった。 4、5 歳くらいの子供たちはとても人懐っこく、いつも「カンウー、カンウー、ジャポネー」と寄ってきた。

セネガルの家庭の食事は前述した通りで、大きなお皿を家族みんなで囲んで食べる。お 米の上に乗るものは日によって変わり、僕の家では週4日魚、2日羊、1日鶏肉といった感 じだった。お手伝いさんがごはんの上に丸ごと乗った魚を手で握りつぶして振り分けてく れるのだが、嫌悪感はなく、ありがとうという気持ちがわいてきた。セネガルでは食事の 時間帯が日本とは違い、朝の9時・昼の2時半・夜の9時だ。昼ごはんがメインで夜は小 腹を満たす程度の量しか出てこなかった。そのため、夕飯はお米の代わりにパンを片手に スープや、パスタ、豆などを食べた。

■日課

大学での授業は午前中に終わってしまうので、午後から時間をいかに使うかが重要だった。基本的に時間のある時は、街に出てぶらぶらするか、家族としゃべっていた。もっと会話をしたかった僕は、自ら日課のルーティーンを作った。授業終了後は事務室に行き、そこで相手の仕事のじゃまにならない程度にしゃべる。教室のある建物を出たところで、おばちゃんと娘がサンドウィッチを売っているので、購入がてらに会話をする。家に帰って昼食をとり、ネットカフェ(1時間80円程度)に向かう。その途中にある家族の1人が

経営している屋台に行き、近所の人と腰を下ろして 30 分ほど談笑。そしてネットカフェに着くと、オーナーと少し会話をする。

セネガル人はのんびりしていておしゃべりが大好きなので、僕もリラックスして話すことができた。自分フランス語がつたなくても、劣等感を感じたり、しゃべることが嫌になったりすることもなかった。セネガルという異国の地で、このようにほぼ毎日しゃべる相手がいることはとても心強かった。見ず知らずの僕を受け入れてくれて、自分の居場所が増えたような気がしてとてもうれしかった。

■セネガルで人気者になるには

僕が 1 ヶ月半の滞在で見つけた人気者になる方法を二つ紹介する。

1つ目は、現地の言葉ウォロフ語を話すということだ。街を歩いているとたくさんのセネガル人が話しかけてくる。お金目当ての人はだいたい英語か仏語で話しかけてくるが、本当に何の用もなく、暇つぶしで話しかけてくる人はみんなウォロフ語だ。みんな会話の流れは一緒なので自然と覚えることができる。



「こっちおいで」「どこから来たの?」「名前は?」「どこ行くの?」が基本的な流れだ。これに対してうウォロフ語で返事をすると喜んでくれる。多くのセネガル人が「シノワー、シノワー」と半笑いで話しかけてくるが、そこで気を悪くするのではなく、一歩踏み込んで話してみると、ウォロフ語しか話さない人たちは皆、邪気がない。また、お金目当てで英仏語で話しかけてくる人に対しても、ウォロフ語をおりまぜて会話をすると、金づるから友達に対応が変わる人もいる。セネガルにおいてウォロフ語はとても重要だ。

2つ目は、セネガルの伝統ダンス「ユーザ」だ。簡単な一定のリズムに合わせて簡単なダンスを踊るだけだ。僕はホームステイ先でこのダンスを教えてもらった。僕が踊ると家族みんなが笑顔になるので頻繁に踊っていた。おそらくセネガル人でユーザを知らない人はいないと思う。

少しのウォロフ語とユーザが踊れれば十分!まず、知らない人に話しかけられたらウォロフ語と仏語でたわいのない会話をする。その後、「ユーザ知ってる?踊ってよ!」って言いながらユーザのリズムを口ずさむ。すると、逆にこっちに振ってくるか、踊ってからこっちに振ってくる。つまり絶対振ってくるのだ。そこで恥ずかしげもなく、本気で踊ったらめっちゃ笑ってくれる。そうすればセネガル人と仲良しになれる。

■小旅行

大学での 1 か月の講義が終わり、僕はセネガル内の旅行を計画した。大学の授業は朝だ

けなので、僕は語学学校でプライベートレッスンを4回受けた。そこの先生がとても良い人で、授業を受けにいくというよりは先生とおしゃべりをしに行くという感じだった。ある日、先生に「観光客全然おれへんとこに旅行したいんやけどいいとこ知ってる?」と聞いたら、「おれの故郷に来いよ。家族の家泊まらしたるで」と言ってくれたので即決し、先生の田舎 Niodior へ行くことになった。 ダカールからセットプラスという乗り合いタクシーを 3500CFA で乗り換えて、Difer まで行き、そこから 500CFA 払い、舟で行かなければならなかった。乗り合いタクシーの待ち時間も含め、約8時間かかった。移動中は地平線が広がる道なき道を走ったり、必死の形相で僕らの車を走って追ってくるマンゴー売りのおばちゃんがいたり、セネガル人の優しい一面を見たりしてとても心地よかった。

Niodior に着いて驚いたのが予想してたより数段田舎だったことだ。もちろんホテルなどはなく、水道も通っていなかった。しかしみんな穏やかで優しかった。先生の甥が僕の面倒を見てくれた。Niodior の人々は、海沿いにある大きなバオバブの木の下(とても風通しが良い)にゴザを持って集まり、日中何をするでもなくただただ談笑していた(写真参照)。地面には貝殻でできている街で、南国風の木々が並び、その奥にはマングローブが生い茂る中、大きなバオバブの木の下たわいのない話をするのはとても気持ちよかった。何もないところで何もしないことこそが最高のリラックスだと感じた経験であった。たった二泊三日の滞在だったが、ダカール以上に人々の温かさに触れることができ、また一つセネガルを好きになった旅行だった。

■小話

◇学生集まったら恐いよー

家族の一人と大学のバスケの試合を見に行ってスタジアムから出たところだった。一人の若者が警察官二人に取り押さえられ騒ぎになっていた。遠目から家族と一緒に見ていたら、スタジアムの中から大量の学生が出てきた。何事かと思っていると、あっという間に警察は学生たちに囲まれ、もみくちゃになっていた。その群衆の中からさっき取り押さえら



れていた男が出てきて文句を言いながら走って逃げて行った。まもなく学生たちもスタジ アムに戻っていった。学生が警察に勝つ国、セネガル。驚きだった。

ある朝、大学に向かっていた。いつも通る大学構内。しかしなにやら人だかりが。大勢の学生が一台の車を囲んでわーわ一騒いでいた。近くにいた学生に「どうしたの?」と聞いた瞬間、車を囲んでいた学生たちがより一層大きな声を上げながら車から遠ざかるように走り始めた。ただ事じゃないと思った僕も走って車から遠ざかると、車から離れた学生たちが地面にある石やコンクリートの塊を車に向かって投げ始めたのだ。テレビで見る光景を生で見られる国、セネガル。

どこで何があるかわからない。危機管理の重要性を改めて感じた出来事だった。

◇セネガル人の会話の9割は・・・

地域差などもあるのだろうが、ワッド大統領の悪口は良く耳にした。大統領は不正にお金を使い、それが政治の不安定にもつながっている、云々。テレビでも政治に関する話が多い。大統領の任期は5年で、任期が終わるまで大統領は変わらない。そのためか、友人の多くは口をそろえて来期は違う大統領になってほしいと言っていた。「大統領が変わったらセネガルの政治や経済がよくなると思う?」と友達に聞いたら「おそらく変わらないけど、それでも今の大統領は嫌だ」とのことだった。

◇買い物はストレス溜まる?ストレス発散?

ダカールには大きな市場がたくさんある。そこを歩くと目の合った人全員が話しかけてきて、商売を始める。一度相手にしてしまうと、いらないと言っても勝手に値切り、勝手に反ギレになってくる。また、世間話をしてからなんとか物を買わそうとしてくる者もいる。正直、最初はストレス以外の何物でもなかった。自分がほしいものがあって、ある程度値切って購入しても、損をしている気になってしかたなかった。

ある日、本当にいらない CD を売りつけてくる人がいた。僕は本当にいらなかったので、ありえないほど低い値段を言ってその場を立ち去った。すると、その人はしつこく付きまとい、最終的には僕が言った値段まで下がったのだ。この日を境に僕の中で買い物が楽しくなった。どこまで値切って買い物をできるか。良い買い物をしたときは、向こうは悔しそうな顔をしながらも「お前はセネガル人やな」と言ってくれる。買い物が楽しかったため、帰るときにはお土産の T シャツを必要以上に持っていた。

■おわりに

2010年8月~2011年8月の一年間は僕にとってとても刺激的なものになった。それまでほとんど海外に行ったことがなかったにも関わらず、1年の大半を海外で過ごし、アフリカにも滞在したのだ。僕は留学に対して強い意識があったわけではないため、留学を決意するときはとても迷った。今まで日本で培ってきたものを一時的に放棄して新たな世界に一歩踏み出すことは勇気がい



る。しかし、留学してみると語学力は上がり、とても積極的な自分がいることに気づき、 多様な国籍のすばらしい人々と出会うことができた。この経験を通して自分自身にもある 程度の自信がついた。もし少しでも留学に興味があるという人がいたら、ぜひ挑戦しても らいたいと思う。自分が成長する手段として留学を経験してみるのはどうだろうか。

《留学アンケート》

① おすすめ

- Niodior
- ワッカムの海
- ・タムタムの体験授業

② マナーやタブー

・国民の94%がイスラム教徒なので宗教関連。

③ 持っていってよかったもの

- ・小さなライト(毎日停電になるので)
- 虫よけの塗り薬
- ・新生銀行の国際キャッシュカード(セネガルでも使用可)

留学前の必見本 or ウェブサイト

- · Lonley Planet
- ・mixi のセネガルのコミュニティ (おもしろいウォロフ語を学べる)